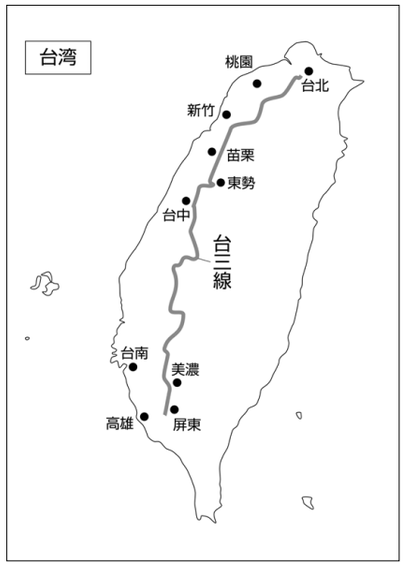
新世紀ミュージアム

台湾客家村のエコミュージアム／台湾

河合 洋尚（かわい ひろなお） 民博 グローバル現象研究部

台湾西部では客家ロマンチック街道の建設がはじまり、客家の歴史や記憶がつまったエコミュージアムがつくられるようになっている。あらたな観光の目玉となる一方で、初期段階であるがゆえの課題も見え隠れする。台湾客家の村に訪れた筆者が、その課題について人類学の視点から考える。

ここ二〜三年、台湾の客家（ハッカ）地域では、エコミュージアムの建設が盛んになっている。エコミュージアムとは、一九七一年にフランスで提唱された「壁をもたない博物館」であり、一九九〇年代より東アジアでも広まった。例えば、中国大陸の貴州省や広西チワン族自治区では、政府と学者の主導により、いくつかの村がまるごと「ミュージアム」とされた。そして、村内の主要な建造物や景勝地をパネルで解説するとともに、それらを村民の手で保護していく理念が掲げられたのである。二〇一六年から、台湾でも、客家が多数住むいくつかの村がまるごとエコミュージアム（中国語では「生態博物館」）とされ、そこで「生きた博物館」をつくりあげていく努力が試みられはじめている。



台湾西部を南北に貫く台三線

客家ロマンチック街道

では、なぜ台湾の客家村でエコミュージアムが突如として注目を集めるようになったのか。それは台湾の政府機関である行政院客家委員会が近年推進している、客家ロマンチック街道（中国語の正式名称は「浪漫台三線（ランマンタイサンシェン）」）の建設と密接に関連している。

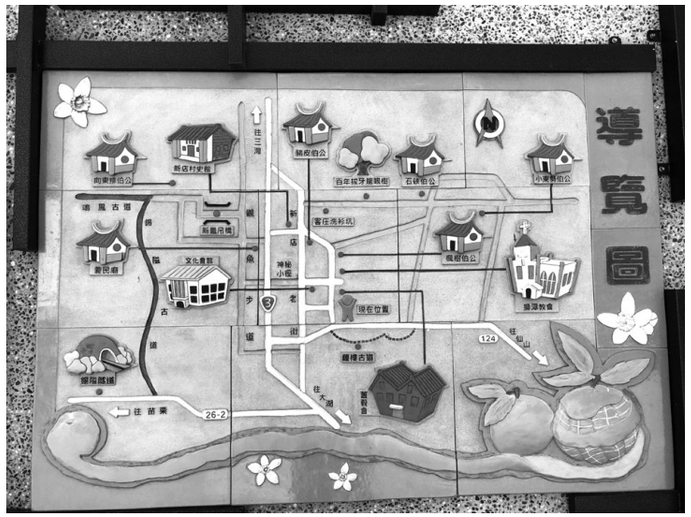
台湾は複数のエスニック集団が割拠する地であり、漢族の一集団である客家は、台湾全人口の約一五パーセントを占めると見積もられている。そのうち客家がもっとも集中して住むのが、台湾西部の南北を貫く台三線とよばれる省道の沿線である。だから、客家委員会は、この道路の沿線一帯を客家ロマンチック街道と名づけ、特色溢（あふ）れる客家文化を資源として地域振興を促進するとともに、そこを観光地としてアピールするようになった。さらに、そこで暮らす客家の人びとが自らの手で客家文化を保存し、継承していくことが推奨されるようになったのである。

佳冬郷であらたに出現した立看板と客家語の詩を描いた壁

詩的景観の創出

台三線は、具体的には北部の台北から南部の屏東までの約四三六キロメートルを指す。客家ロマンチック街道の中核地は、桃園から、新竹、苗栗、台中の山岳部までの一帯であるが、エコミュージアムの範囲は最南端の屏東までを含んでいる。

二〇一八年秋、わたしは、エコミュージアムとして指定された南部の屏東県佳冬（ジアドン）郷と北部の苗栗県獅潭（シイータンシアン）郷を訪れた。このふたつの客家村は政府と大学の提携で「生きた博物館」としてつくられはじめており、村内では、歴史ある建造物（祖堂、教会、廟（びょう）、集合住宅、日本統治時代の神社など）が、文化遺産として地図上にマッピングされている。そのうえで、各建造物の前には、名称や歴史・文化的背景を解説するパネルが立てられるようになった。特に佳冬郷では、小道の壁に現地の詩人が詠んだ詩が書かれるようになり、客家の生活にまつわる記憶が想起できるようになっている。こうしてロマン溢れる客家の村が演出されているのである。



獅潭郷の村内に立てられた村落地図（写真はすべて2018年に撮影）

歴史記憶の再発見に向けて

客家ロマンチック街道の建設は、政府や学者が主導しているが、客家村の住民が自らの手で客家文化を保護・継承し、ときとして創生することを目標としている。そのため、住民が主役となって住環境を整備し、文化の保護・継承・創生を基本的理念とするエコミュージアムが注目を集めるようになったといえる。だが、ここで鍵となるのは、どの歴史的建造物を選び、どのように村落の歴史を物語るのかである。

いうまでもなく、村落には、政府や大学が「正統」とする村落の歴史のほかに、村民が生活実践に基づき紡ぎあげてきた複数の歴史記憶が存在する。例えば、政府や大学がロマン溢れる物語でもって宣伝していた小道に対し、そこに住む人びとが「かつての苦しい生活しか思い出せない」と反論した事例をわたしは耳にすることがあった。台湾の客家村におけるエコミュージアムの建設には、エリート層を中心とする一部の村民しか参与しない傾向がまだ強い。研究者が現地において長期のフィールドワークをおこない、住民と手を携えて多様な歴史記憶を拾いあげていく公共人類学の試みが、今後求められているように思えてならない。

獅潭郷の目玉のひとつであるジョージ・L・マカイ建設の古い教会